

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# 宇野弘蔵の「重商主義段階論」について：その批判的考察

著者	櫻井 毅
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	74
号	1・2
ページ	27-67
発行年	2006-08-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/81">http://hdl.handle.net/10114/81</a>

# 宇野弘蔵の「重商主義段階論」について

——その批判的考察——

櫻 井 毅

## 1

宇野弘蔵の経済学体系の中に占める段階論の意義についてはここであらためて述べる必要はないであろう。マルクスがまだ見ることのなかった十九世紀末以降の爛熟にいたる資本主義の歴史的な発展過程を踏まえ、それを三つの段階においてその特徴を把握し、究極の目標である経済の現状を分析する方法的手段としてそれを提起したのは、周知のように宇野弘蔵であった。宇野にあっては、資本主義がいわゆる帝国主義段階に入り、資本主義の自立化を支える歴史的純化傾向が阻害されて、商品経済以外の諸要因によって部分的に支えられざるを得ない体制に代わっていくとき、はじめて原始的蓄積過程を通ずる労働力商品化の確立をめどにした資本主義の初期段階が与えられるとともに、さらにその後の資本主義の爛熟そしてその没落の時期をも、歴史的純化傾向に則った産業資本の全面的な支配が成立するかに見えた資本主義の典型的な発展の時期と、段階的に区別することが出来るようになったのであった。

資本主義の歴史的純化傾向なるものを基準にする、この宇野の経済学の方法、そしてその段階論について、もとよりここで全面的に論じるつもりはないし、その準備もない。ここでは宇野の段階論における重商主義段階について、そこでの商人資本というもののもつ役割とその蓄積の意義を、宇野が考慮していない農業部面の資本主義化 (Agrarian Capitalism) と

いう現実とその果たした役割の検討を含め、あらためて考察することを目的にするにとどめたい。

## 2

宇野は、段階論の分析意図を「資本主義の発展の段階規定は、各段階において指導的地位にある先進資本主義国における、支配的な産業の、支配的な資本形態を中心とする資本家的商品経済の構造を、いわゆる『ブルジョア社会の国家形態での総括』としても、世界史的に典型的なるものとして、その国家形態自身も、また『国際関係』も、この発展段階に応じて変化するものとして、解明するものとなる。それは経済学のいわゆる部門別研究の一般的規定をなすものといってよい」(『宇野弘蔵著作集』九、53頁)と説明している。

そしてそれはまた別の側面から、さらに詳しく次のように説明されている。「段階論は、直ちに資本主義の発生・発展・没落の過程そのものをも具体的に示すものではない。事実、資本主義は、世界資本主義として発生し、発展し、没落するものといってよいのであるが、それは一体としてかかる歴史的過程を示すものではなく、特定の国が指導的地位にあって、資本主義の世界史的発展を示すにすぎない。他の諸国もこれに影響されて資本主義化するのである。資本主義の発生・発展・没落の過程は、具体的には個々の国においてそれぞれ個別的なる特殊の事情と関連とをもって展開されるのであって、段階論の規定をもって尽しうるものではない。また段階論の規定は、それが与えられる、かかる指導国にあって、世界史的意義を有する面をとって展開されるに過ぎない。……産業においても、各段階に指導的地位をとる産業における、資本主義の発展が問題となるのである」(同上、49頁)と。

そして、ここで問題にする重商主義段階については、すでに以下のような説明が与えられていた。すなわち、「段階論では、原理論では問題にな

らない、十六、七世紀という特定の時期における、イギリスという特定の先進国において、羊毛工業という特定の産業を基礎にして展開される、商人資本をもって資本主義の発生期を特徴づけなければならない。それは中世紀的な封建的社会の近代的な資本主義社会への転化の過程として、旧社会の基礎をなす直接の生産者と土地との結合を多かれ少なかれ強力的に分離する、いわゆる資本の原始的蓄積の時期をなすものである」（同上、45頁）と。そしてまた、さらに、「資本主義の発生期は、マルクスも明らかにしているように、資本主義に特有なる、その人口法則をなお展開しうる基礎をえていなかった」（同上、46頁）ために、資本の原始的蓄積が強力（Gewalt）によって労働力を商品化する過程であることが強調されるものになっているとみてよい。

これらは要するに、段階論が世界資本主義の現実的發展の叙述ではなくて、それぞれの時代における指導的な先進国を典型国として、その代表的な産業を支配している資本形態をもって、それぞれの時代の資本主義分析の基礎におくということであり、十六、七世紀以降のイギリスの羊毛工業が代表的な産業で、それを支配している商人資本がその代表的な資本形態であるということであろうか。具体的な史実をたとえばイギリスにとったとしても、それがイギリスの歴史的過程を経済史的に解明するというのではなくて、それを世界的な資本主義の發展段階の典型的規定として扱うというのである。

重商主義段階に限っていうと、宇野はかつて、スウィーージーのドップ批判から始まった有名な「資本主義の移行論争」といわれた国際的な論争について関説した際、「最も重要な問題点は『封建制から資本主義への移行』の時期における商人資本の役割をいかに評価するかということにかかっているといってもよいであろう」（「過渡期の取扱い方について」, 同上、358頁）と、述べていたことがある。そして、「旧生産様式に分解的作用をなすにしても、十六世紀後半以後にあってはそれは寧ろ資本主義の初期の資本を代表するという歴史的意義をもっていた。それは直接的にはそうはい

えない場合が多いが、資本形態自身が生産過程の中に入ってゆく過程を示すものであった」(同上、366頁)と、いささか難解な解説を加えている。

問題は、資本主義初期段階における商人資本の役割である。ここでは宇野は「羊毛工業という特定の産業を基礎にして展開される、商人資本をもって資本主義の発生期を特徴づけなければならない」(同上、45頁)というのであるが、その商人資本は実はすでに生産過程を間接的にせよ自ら支配している未熟な産業資本になっているように思われる。上記の、十六世紀以後の商人資本は「資本主義の初期の資本を代表する」という言い方は、そういう意味を込めているのであろう。しかし、重商主義段階の資本主義をどう考えるかの点で、そこには大きな問題が潜むのではないか。商人資本をその段階の支配的な資本形態というとき、その商人資本はあくまでも  $G-W-G'$  の商人資本であったのではないか。それは収奪関係を含みながら、あくまでも売買差額を基本とする資本である。その資本が生産過程を間接的にせよ支配したのは、例外的にしか存在していなかったとされるマニュファクチュアを除けば、問屋制家内工業の形でしかない。すでに形式的になっていたとしても、家内工業の形で生産は資本からは独立していて、商人資本がその流通を媒介しつつ生産に外部から関与して、それを拡大させていただきただけなのではないか。あえて羊毛工業をここで出してきたのは、もちろんそれが当時農業以外では最大の産業であったためであろうが、他方で、生産過程への生産組織の関与の仕方で資本主義の段階を画するという理解が宇野にあったということも考えられる。それは、農村の女性の副業などによって支えられていた零細の小工業に過ぎなかったからである。マルクスが『資本論』の第一部、第四篇「相対的剰余価値の生産」の中の「協業」、「分業とマニュファクチュア」、「機械と大工業」の各章で展開した順序を、あるいは歴史的になぞったところがあったのではないか、ということである。

それからさらに、商人資本の活動の中には、直接の商業活動とは別に、また生産を間接的に支配するというのでもなく、十七世紀にはすでにイン

グラントに成立していた農業における資本家的経営とその前提でもあり結果でもあった市場の展開が、関わってくるものがある。農業部面の地代収益を中心とする資本蓄積と内外の投資活動が、十八世紀以降の工業化の進展に果たした役割が考えられるが、宇野はそういう問題には一切触れていない。これも問題になる。

それにしても、宇野は、その段階論を自らの『経済政策論』（1954年）の中で具体的に展開しているので、問題の検討のためには、まずそこからその内容を見ていくことが先決であろう。

重商主義段階論はその『経済政策論』の第一編「重商主義」で説かれている。宇野は、「この過程は、最初から国際的な商業取引を背景とし、それによって促進せられつつ国内的に地方的経済を国民的経済に転化する過程として現われたのであって、経済的には商人資本、政治的には絶対王政ないし近世初期の統一国家が極めて重要な役割を演じ、重要な生産手段としての土地と直接的に結合されていた農民が土地を失うことを一般的前提として、農業と工業との商品経済的分離過程を通して労働力の商品化を国民的に一般化してゆく歴史的過程にほかならない」（『経済政策論』、『宇野弘蔵著作集』七、49頁）と述べている。重商主義段階は、ここでは国際的に活躍する商人資本に促されて地域的な商品経済が、世界市場の及ばず影響の中で、全国的な国民経済に拡大発展してゆく過程として把握されている。そして商人資本の収奪による蓄積をもって資本主義への転換を果たそうとする重商主義政策にかかわる絶対王政の役割が重要視され、さらに毛織物工業が問屋制家内工業として展開されるのにもなって、その内部での生産関係の変化が資本家的生産様式の一般的な成立に大きな意味をもつということになるのである。しかし商人資本による収奪と、問屋制度の下での、不完全にしろ、生産者の搾取という新しい生産関係の成立とは、どう関わってくるのであろうか。

さらに詳しく見てみよう。その「重商主義」と題する第一篇は、三つの章に分かれ、それぞれ「発生期の資本主義」、「商人資本としてのイギリス

羊毛工業」,「重商主義の経済政策」と名づけられているが、まずその第一章をみよう。

宇野は、十五世紀以来の世界市場の発展を受けて、それまで封建的な制約から生産過程に参加できなかった商人が、徐々に生産を支配するにいたると述べ、いわゆる問屋制的家内工業が、間接的ながら、生産過程に資本の支配力を浸透せしめてゆく、というのである。宇野によれば、個別的な小生産者は形式的には中世的な独立小生産者でありながら、「もはやそれに復帰しえない、資本関係の下に包摂せられてゆく」(同上、七、51頁)とされたのである。宇野は、マニュファクチュアの形態であったら、それは「明らかに労働力の商品化を基礎とするもの」(同上)であるという。しかし、「本来のマニュファクチュア時代」というマルクスの規定にもかかわらず、宇野によれば、マニュファクチュアは問屋制度を排除して全面的に生産を支配することはなかった。だから問屋制度においても、農業からの工業の分離を通して市場を拡大することに成功すれば、「それは一方では農業自身をもますます商品経済関係の中に引き入れると同時に、他方では農業から全く分離しつつ、漸次に原料、道具、仕事場というように生産手段を喪失した生産者を——もはや独立の生産者といえない生産者を——広く農村を基礎として造出してゆく」(同上、52頁)のであって、その「手工業の部分化に伴う収奪の利益」(同上)を資本は獲得し、事実上、「直接の生産者を形式的には旧来の小生産者にとどめながら、実質的にはマニュファクチュアの労働者と異ならない賃銀労働者に転化せしめつつその資本を蓄積し、資本家的生産方法の発展の基礎を形成したのである」(同上)とされるのである。そして、羊毛工業における問屋制度の下での生産過程における資本家的生産様式への新たな転換は、まさに「直接の生産者と生産手段との分離の過程は、従来、農業と直接に結合せられていた、特に羊毛工業の工業としての独立化として具体的に実現せられる。この基礎をえてはじめて暴力的変革も資本家階級形成の槓杆となる」(同上、53頁)という形で説明されているのである。

原始的蓄積過程を通して形成される無産民たちが、問屋制的に支配されている羊毛工業の生産過程に、賃労働者として鋳なおされて、あたかも次第に中に入り込んでくるかのごとき印象を、ここから読み取るのは間違いであろうか。もしそういう事実が部分的にあったとしても、そのことが直ちに資本家的生産様式への転換といえるであろうか。マニファクチュアのようなものを別にして家内工業の中で考えるとき、その生産過程において資本と賃労働との役割分担が可能になっていたのだろうか。実際、またそれは後の綿工業に見られる新しい資本・賃労働の生産関係の成立に直接につながるものになっていないのではないか。

続く第二章は「商人資本としてのイギリス羊毛工業」であるが、内容は比較的経済史的な説明に近い。ブリストルを中心とする西部地方の羊毛工業とヨークシャーを中心とする北部地方の羊毛工業との成り立ちの違いを明らかにしながら、十七、八世紀イギリスの羊毛工業における資本主義化の道筋を説くのである。

梳毛については、ノーリッジを中心とする東部地方で主として行われていたが、紡毛工業は主として西部地方と北部地方で行われており、それは対照的な発展を辿ったとされる。宇野はもっぱら E・リップソンに依拠しながら、西部地方のクロージャが農家の副業として働く女性を雇用して生産に従事させることを通じて、「原料を購入し、製品を販売する商人資本家たるクロージャと、織機と職場とをもちながら賃銀労働者化しつつあった織手と、その下に労働する徒弟、職人との三階級を構成しつつあった」(同上、57頁)とする一方、北部地方のクロージャは「自ら原料を買入れて製織したのであるが、もちろんその規模は極めて小さく、ほとんど毎週市場に売り出す製品の代価でその経営と生活とを維持する」(同上)いわゆるワーキング・クロージャーとして規定されるのである。そして宇野は、「十七世紀から十八世紀にかけての商人資本のもとに漸次に形成せられつつあった資本家的社会関係は、手工業者を賃銀労働者化し、また部分労働者化しつつあったのであって、具体的にはまず商人自身のもとに行なわれ



た部分的仕上げ工程のマニファクチュア、さらに進んで十八世紀の後半北部地方のオピュラント・クロージャのもとで行なわれた製織マニファクチュアにその一般的な発展をみたものと解すべきではないか」(同上, 60～61頁)とするのである。いうまでもなくそこでの主役の資本家は商人資本である。それは「発生期の資本の蓄積として当然に小生産者の収奪の過程を主として行なう資本である」(同上, 61頁)。またそれは「常に外国貿易に投ぜられる資本と連携してイギリス国内の資本主義化を促進した」(同上)ものであることを宇野は明らかにしている。

問題は商人資本の生産過程への関与の仕方である。そしてそこには問屋制度を通じる小生産者の商人資本による部分的支配から、マニファクチュアにおける工場内分業を通じる生産過程の全般的掌握によって自らを産業資本に転じつつ、最終的に産業資本として機械制大工業における生産過程の完全な支配にいたる歴史的移行の構図が、背後に予想されているのではないだろうか。あるいは封建制から資本主義への転化を、小生産者からマニファクチュアを通して機械制大工業にいたる工業生産の内部的な生産組織の発展の筋道で捉えようとする視角が見て取れるのではないか。しかしともかくそれは、大塚史学やドップの方法と区別した宇野自身の商人資本の資本主義形成における歴史的役割を、逆に軽視することにならないか、と危惧されるのである。

実際、商人や金融業者、そしてとうの昔に封建的領主であることを辞めて、今はただ商人的利益を追求する地主による資本蓄積が、十六世紀以降の農地のエンクロージャによる無産民の創出と結びつくとき、資本と賃労働という生産関係を軸にした資本家的経営が初めてイギリスで成立したのであって、しかもそれは十八世紀末から十九世紀初頭にかけて綿工業において初めて実現したという通説よりむしろ、そのずっと以前の十七世紀には、すでに地主、借地農業資本家、農業労働者という形で、しばしば「農業の三分割」と呼ばれる新しい資本家的社会関係の先行的な形成が認められていたと考えるべきではないかと思うのである。後に詳しく述べるつも

りであるが、工業生産における生産組織の変化からもたらされた新しい生産関係の形成よりはむしろ、イングランド農村における社会関係の緩やかな変化、つまり地主による土地所有の大規模化の動きが借地農業者への依存を深め、その借地農業者が市場の拡大のために生産性向上に努めて、それが労働者の雇用に結びつくとき、その変化こそが、イングランドに最初の資本主義をもたらした原因になったと思われる。宇野の理解とは違って、十六世紀のイングランドでは、地主は封建的な性格というよりむしろ商業的利益を求める資本家的性格をあわせ持つ近代的地主にすでに転じていたと考えられるのである。フランスの地主のように商業に従事することで身分を剥奪されるという危険もなかった。だからこそ利益を求めて土地を囲い込んで牧草地にする。共同体的な規制は残存したとしても、農奴制はすでに解体しているのである。まことに、R.H.トーニーが言うように、「固定収入が減少し、利潤が増大しつつあるとき、救済の道が、地主としての収入を縮減し、企業家としての収入を伸ばすことにあることは、誰も疑わないところであろう」（トーニー、浜林正夫訳『ジェントリの勃興』33頁）。実際、地主は収入の増大を経済外的な強制力によってではなく、市場経済的な才覚によって獲得しなくてはならなくなっていたのである。続いて最後の第三章「重商主義の経済政策」に入ろう。

その章で宇野は、「たしかに資本主義の発生は、対外的な発展を通して国民的統一を実現する過程の内に、確保されるものといってよい。しかもそれは世界史的には西欧諸国によって互いにその商業的覇権を争われたつ、結局、その覇権を握ったイギリスにおいて十七、八世紀にわたって行なわれた重商主義政策として『体系的に総括され』、資本主義自身を確立する基礎を形成したのである」（『宇野弘蔵著作集』七、62頁）と述べ、さらにそれが封建社会から資本主義社会への転換の過程としては、「資本は商人資本の収奪による蓄積をもってその転換を促進される」（同上、63頁）ものであることを明らかにしている。そうしてしかも、その過程は、「独自の力をもって実現するわけではない。また商人資本としてはそういう力

を有しないのが当然である。それは社会的過程に対してはいわば外部的たるにとどまり、種々なる社会に滲透すると同時にその独自の階級を自ら形成しうるものではない。そこにまたその過程を『温室的に促進して過渡期間を短縮する』のに役立つ国家権力が——それもまた『それ自身ブルジョア的发展の一産物』でありながら封建的権力を多分に保有する絶対王政としての過渡的形態の国家権力さえも——介入しうる余地が与えられる」(同上)ものとされている。

ここからおよそにせよいえることは、絶対主義国家の政治的・軍事的権力に支えられた商人資本の国際的な活躍が、商品経済の内部的な浸透をより深め、また同時に、そのことによる国内農村におけるエンクロージャ運動の拡大が、農民層の分解を通じて無産民を大量に発生させ、それを問屋制支配のもとでの家内工業の中に引き込む形で、その生産過程を資本家的な生産関係に作り直していったとして、宇野がこの歴史的变化の過程を、典型的な形として、描いているということであろう。さらに宇野は、ここでは十六世紀後半を境にして時期を二つに分け、重商主義政策の性格もその時期による違いを明らかにしている。一方で、「十五、六世紀のイギリス王権の諸方策はなお明確に重商主義政策というよりも、むしろしばしばその出発地点を固めるものにすぎなかった。事実、その結果においてはいずれも資本家的生産方法の発展に必要な前提条件を形成しつつあったものといえるのである」(同上、64頁)と述べ、他方で、過渡期の政権としてその二面的性格を脱却した後も、十七、八世紀を通じる「旧来の小生産者の近代的な賃金労働者への転化が、政治的権力によって多かれ少なかれ強力的に促進されてきたことに変わりはない」(同上、65頁)ことを明らかにするのである。そして国家の権力によって支えられながら、「商人資本の収奪による蓄積をもって」(同上、63頁)行われるその政策は、前期は特許制度として、後期は、航海条例や穀物条例などを含めた一般的な貿易制度をめぐるいくつかの政策として、取り上げられている。

特許制度として初期の重商主義政策の中で最も重要なのは、宇野によれ

ば、商人に与えられる外国貿易や植民地経営に関するものである。東インド会社、アフリカ会社、ハドソン湾会社などの特許会社は当初はギルド規制会社に過ぎなかったが、のち株式会社となり、政治的に広範囲の権力を与えられ、またそれ自身略奪的性格をもっていた。「それは明らかに国王その他の政治的勢力と商人の経済的利害とを結合することによって行なわれた富の強力的集中政策にほかならなかった」(同上、67頁)というわけである。

これに対して航海条例は、初期の個別的な特許制度を超えて、さらに国民的利益の独占をめざすものであった。それは広く知られているように、アメリカ植民地の貿易の独占を図るために、その商品の輸入をイギリス船に限定したり、また綿花、砂糖やタバコのような「列举商品」の輸出先をイギリス本国またはその植民地に限定するなど、の政策であって、「明らかに当時の競争国オランダに対抗する政策である」(同上、69頁)。

オランダに対して航海条例をもって対抗したイギリスは、さらにより一般的な貿易政策をもってフランスに対抗する。毛織物の輸出市場を確保するために、原料としての羊毛の輸出を禁じたり、フランスに代えてポルトガルからぶどう酒を輸入することで、ポルトガルにおける毛織物産業の発展を阻止したりする政策のことである。宇野によれば、「こういう羊毛工業を中心とする貿易政策は、十七世紀後半以後、イギリスにおいては重商主義的な統一的体制を形成したのである」(同上、71頁)。

宇野は最後に穀物条例について述べている。この穀物条例は、中世からあったが、この段階では、イギリスへの穀物輸入の抑止に向けられた政策は輸入関税という形になり、しかもそれは輸出奨励金制度の採用をも含むことによって、輸出奨励の政策に転じ、耕作の拡大を通じて地代の騰貴を招くものとされたのである<sup>(1)</sup>。宇野は、これが「資本家的利益の地主的利益に対する妥協的譲歩をなすものとして重商主義の一面を示すものといえる」(同上、72頁)として意義づけている。ただ、宇野は触れていないのだが、これは地主的利益にとどまるものではない。すずにも述べたことだ

が、十七、八世紀にはイギリスは農業においては資本家的な経営はかなり一般化してきていて、農業における穀物価格の上昇はたんに地主だけではなく、むしろ場合によってはそれ以上に、借地農業資本家にとって有利な条件であったといわなくてはならない。それは農業資本家の利潤率に大きく影響したはずである。したがってそれは、地主に対する譲歩というよりむしろ直接には農業資本家の利益を図るものであって、借地農業資本家の利潤の増大がその分け前としての地代の増加をもたらすことで、地主の利害が付随するということが出来るのではないか。つまりこれは「地主的利益に対する妥協的譲歩」ではなくて、むしろ資本家的利益の拡大に向けた政策ではなかったか、と考えられるのである。その点ではむしろ産業資本の独占的な利害を守るための対外貿易政策であって、商人資本と国家の政治的権力のヴェクトルとしての重商主義政策と呼ぶのはふさわしくないということになるかもしれない<sup>(2)</sup>。これはもちろん、大塚史学でいうところのマニファクチュア産業の保護育成の政策を指すものでもないが、この穀物条例が、重商主義政策を越えて、たんに地主の利益だけでなく、むしろそれが依存する借地農業資本家の利潤の拡大を図るものであり、イギリスの農業という当時国内でもっとも大きな経済領域を占める産業の保護育成をめざす国家の政策であることに間違いはないであろう。そしてその部面における蓄積が、商人資本の蓄積とあいまって、イギリス産業資本主義の圧倒的な勝利を演出するものとなったことは明らかであろう。その後十九世紀に入って、イギリスにおける農業の役割に変化が生じ、今度は穀物条例の廃止が問題になるという歴史の歩みについてはここであらためて言う必要もないであろう。

- (1) 「そこでは、テューダー朝がなお維持していた『福祉』政策的な要素が欠落し、地主・農業資本家的——ジェントリ的——な利害がストレートに立ち現われているのである」(川北稔『工業化の歴史的前提』91頁)。
- (2) この点について大内力は、次のように述べている。拙稿とは対象の時期

の違いもあり、必ずしもその意味を同じくするものでないが、引用しておこう。「それは宇野博士によれば『資本家的利益の地主的利益に対する妥協的譲歩をなすものとしての重商主義の一面を示すもの』ということになるが、じつは当時農業の技術的改革＝産業革命の進展とそれにとまなう……第二次囲い込み運動の進展とによって穀物生産が拡大し、穀価が低落しはじめたことに対応した政策であり、同時に輸出拡大による貿易差額の改善という狙いをももっていたとみるべきであろう。その点でそれはかならずしも商人資本の利害に反するものではなかったのである」(大内力『大内力経済学大系』四、100頁)。

### 3

宇野の重商主義段階論の整理を終えたので、次にその吟味に入るが、そのためにはその時代の歴史的状況について、あらかじめ概観しておく必要があるだろう。十六世紀以降のイングランドの経済史的な展開をここで確認しておこう。西欧社会でもイングランドだけにしかなかった近代的所有権の早期の確立という特徴が、資本主義の生誕のまさに決定的な契機となるからである。つまりフランスに長く残った中央集権制といわゆる分益小作制とは対照的なイングランドの大土地所有制度である。最近、この点を強調しているのは R・ブレナーである。彼の考えがイギリスでも日本でも定説としてまだ受け入れられているわけではないが、封建制から資本制への移行についての理解という点で、従前マルクスや宇野に学んだ我々の理解からさほど逸脱するものではないと考えられるので、以下ではブレナーの理解を元に、それとほぼ同じ理論的立場に立つと思われる D・マクナリの叙述 (David McNally ; *Political economy and the Rise of Capitalism, —A Reinterpretation*, 1988) に助けを借りながら、出来るだけ簡潔に、私の常識の範囲内で整理したものを述べるにとどめたい。

出発点は西欧社会全般を襲った封建制の危機である。十四世紀にヨーロッパは急激な人口減少に見舞われる。これは必ずしも黒死病だけが原因で

はない。ブロック (Marc Bloch) が「第二の封建制」といみじくも名づけた十一世紀から十二世紀にわたる増大する人口圧力と土地の新たな開墾の動きは、やがて逆転して体制の維持の妨げになってくる。収穫逡減による土地生産性の低下が地主と農民との分配比率を悪化させた。農民は急激な死亡率の増加によって生存の危機にさらされることになったのである。かくしてヨーロッパの人口は、十四世紀には半減したとさえいわれ<sup>(1)</sup>、まさに封建制の危機を体験することになる。

- (1) 「ヨーロッパの人口は1315年から1380年の間に半減したように見えるほど死亡率の上昇は破滅的であった」(D.McNally ; *Ibid.*, p. 3)。

農民は自分の生産手段を自分で持っているので、自らの生産行為は地主から独立している。しかし自分自身の生活を向上させるために生産性を上げて収穫を増やすという動因は自分自身の中にはない。それでは封建領主が経済外的強制を強化すると、それに対抗できない。農民は土地の生産性を上げるために技術的に改善する知識もないし、それを負担するための資金もない。彼らがその収穫物の供給先を市場においているわけではないから、生産性の向上のための強い誘因となる市場の刺激もない。そのため再編封建制とも言われる領主の経済外的強制の強化は、かえって農村の窮状を強め、土地の生産性をさらに低下させた。それは生産物の配分をめぐる階級間の緊張と対立を強め、封建制の危機はさらに深まらざるを得ない。しかし、ブレナー (R.Brenner : *Agrarian Class Structure and Economic Development in Pre-Industrial Europe*, in, *The Brenner Debate* ed.by T. H.Ashton and C.H.E.Philpin, 1985) に従えば、この危機に対応する社会的状況がイングランドとフランスでは大きく違っていた。

ブレナーは述べている。「西欧でさえも農奴制の崩壊は、どんな形ででも自動的に資本主義を、あるいは見事な経済発展を導いたわけではない。十五世紀末にはヨーロッパ全体に人口圧力や市場の発展や穀物価格の上昇



があった。イングランドでは領主は所有地を統合し、それを大きな資本家的借地農に貸し出した。そして借地農は代わりに、賃労働と農業改善の基礎のもとにその農場の経営に当たった、ということを我々はみている。しかしフランスでは比較的わずかの統合しかしていない。領主によって直接支配されている土地にあっても、……通常、小さな区画で貸し出されて、小作農によって耕作されるのである」(Brenner, *Ibid.*, p. 46)。かくて、その結果イングランドに最初に農業資本主義が誕生するという話につながる。てくる。

しかしその話の前に、十四世紀のイングランドの状況を見よう。そこに大きく特徴づけられるのは、激しい農民一揆の爆発である。1382年の叛乱は、農民人口の減少にもかかわらず行われた貨幣地代の増額と人頭税に対して向けられたものである。その反乱は成功しなかったものの、農民はそうした反乱で領主からある一定の譲歩を導き出すことに成功した。十四世紀の前半とその後半を比較すると、農民の所得にはかなりの増加が見られるという。土地は慣習的保有からコピーホールド（贍本所有）に転化しつつ農民に移転され、その所有権は次第に確保されるようになっていったが、完全に領主の所有権を放棄するものではなかった。ただ大きな荘園は解体され、直営地は貸し出され、その規模が縮小すると、反対に農民の保有地は拡大していった。それはもはや農奴制とはいえない。十五世紀は「イングランド農民の黄金時代」と呼ばれるようになっていた。

イングランドの農民は、ある程度確実な土地の保有権を得、さらに安定した長期の借地権を確保し、しかも穀物価格の上昇に恵まれたのである。市場への農産物の出荷が増えることで貨幣地代の負担も相対的に安定ないしは減少して、農具や家畜などへの投資や蓄積のための剰余さえ可能になった。十五世紀、十六世紀のイングランドに特徴的な存在であった「ヨーマン」あるいは独立自営農民といわれる裕福な農民が出現してきたのは、そのような状況下であった。

そして十六世紀30年代に始まった宗教改革に伴うヘンリー八世による修



道院の解散と全土の三分の一とも言われたその領地の没収、およびその後の土地の売却が、大きな意味をもつことになる。すなわちその売却に応じたのは国王の家臣や都市の商人とか金融業者であったといわれ、彼らは新興のジェントリとなって、以後、積極的に農業経営を営んでゆくのである。H.J.ハバカクは、この時期、「大所領を有していた名門の家系は、所領を満足に経営することができず、物価騰貴によってひきおこされた新しい状況にその体質を順応させえなかったので、ロンドンの市民たち——その中には法律家や政府の役人もいるにはいたが、大部分は商人だった——がその所領を買い取っていった。商人たちが土地を買い込んだ一つの理由は、土地所有によって享受できる社会的名声にあった。しかしより大きな理由は、こうした名門の未改良の所領が経済的に有利な投資の対象たりえた、ということにある。このような未改良地では、囲い込みを行ない、搾取地代を取り立てることができたから、改良後の地代収入は土地のものの買値に対して非常に高い利潤を保障したものであると思われる。十六世紀および十七世紀初頭の農業発展が、こうした商人の資本と商才からもたらされたものであることは、これで了解されよう」（ハバカク、川北稔訳『十八世紀イギリスにおける農業問題』9頁）と述べている。この点はトーニーの調べによれば、1561年から1640年にかけて、七州のうちの2547のマナーの所有者は、国王、貴族分合わせて8.1%に対してジェントリは80.5%に達していたといわれる（トーニー、浜林正夫訳『ジェントリの勃興』88頁参照）。ハバカクがその意義を強調する貴族ではない上層の地主のスクウィア階層は、その定義が難しいが、トーニーは、ここではそれをジェントリ階層の中に入れていいる。ともあれ、そこでは土地の封建的領有権はすでに解体されていて、土地の近代的な所有権が広範に成立していたといっている。J.H.クラップムも「1500年以来、イングランドの地主階級には大きな変化が起こっていた。封建貴族はずっと前から消滅しつつあった」（クラップム、山村延昭訳『イギリス経済史概説』下巻、295頁）と述べている。実際、土地の売買は盛んであり<sup>(1)</sup>、十六世紀から十七世紀にかけて土地価

格の騰貴もまた大きかったようである。

- (1) 「エリザベスとその二人の後継者の時代には、経済的政治的情勢はともに不動産の売買を促進し、他方、宮廷が限嗣相続に反対したことも、これに力をそえた。経済的な力は、時折の激しい不況を別とすれば、土地に対する需要を増大せしめるよう、たえず作用し、ますますその力をつよめたし、政治的な力は、定期的に大量の土地を新たに市場へもたらして、有利な投機のをくりかえし提供したのである」。(トニー前掲書、43頁)

そういう中でさらにエンクロージャ運動が始まっていたのである。それは一方では富農のあいだで行われた農地の囲い込み、すなわち地条の整理、土地の再分配と統合であり、他方では地主の旧直営地の囲い込みであった。マルクスが、羊毛の騰貴から農地を羊牧場にしようとする地主による直営地の囲い込みの悲惨さを、『資本論』の中で描いたのは周知の通りである。ただこの囲い込みは、牧羊地のためだけでなく、むしろ穀草式農地のためのものが主力になったともいわれており、またそれはイングランド全土に及んでいるわけではなく、その規模も比較的限られていたといわれる。また囲い込みが売買の形式を通して行われることはあったとしても、そこに権力の力が働いていたことも否めない。だから「羊が人間を食う」といわれたように社会的衝撃は大きかったといえよう。実際、王権は、はじめその囲い込みの動きを制限しようとした。絶対主義の制度的維持を目指したこともあったろうが、しかし度重なる凶作による食糧生産の縮小による穀物価格の騰貴がもたらす社会的混乱を恐れたこともある。そしてまた、その囲い込みの進展は当然、領主ないしジェントリ地主にとって、私有権の行使であり、その結果、貧しい農民を追い出して、土地を失った無産民を新しい階級として創り出すことを意味するものであった。しかも内外の市場の不況による農村の家内工業からの失業者の増加もそれに輪を掛けた。かくして十七世紀のはじめには、農村に地主および、かつての農民に代わって定期借地人となった裕福な大借地農業者、つまり広い

意味でのジェントリ階級とすべてを失った無産労働者階級がすでに存在し始めていたことになる。地主たちは物価の上昇に伴う自らの購買力の減少を何とか食い止めるべく、コピーホールド（贍本土地保有）から地主の意思だけで契約を更新できるリースホールド（定期土地保有）の形式に代えるように努力した。彼らは契約を毎年、あるいは数年毎に更新して、地代を動かせるようにしたのである。これは土地の地力の保持を困難にして地力を著しく荒廃させる原因となった。しかし彼らは自由小農民の土地を買い、直営地の囲い込みを拡大していくことで、土地の利用効率を高め、働く農民に対する強制を強め、生産性を上げて、収入を増加させようと図った。その頃から次第に導入されるようになった土地の整備、開拓や輪作などの新しい農業技術も、また農民に強制された手段である。こうしてますます大規模化に追い込まれた農業は、生産性の向上を目指して労働者を雇用する資本家的な経営に向かって行くことになるのである。この過程で人口増に伴うイングランドの食糧危機は完全に克服されることになる。そして同時に、農場は、市場に対応した生産物、とりわけ食料品を供給する経済単位として定着してくるのであった。

このようにして価格が、あるいは地代、利潤、賃金が市場の状況に規定されるようになってくる。広大な土地を所有した大地主は、農業労働者を雇用して利潤を得、それを蓄積してさらに莫大な地代を払ってくれる裕福な借地農業者に、積極的に土地を貸し出す。そういうところに「農業の三分割制」つまり地主と借地農業資本家と農業労働者という三肢構造をその特徴とするイングランドの農業資本主義が登場してくるのである。地主は以前のような経済外的強制によってではなく、経済的な契約関係を通して、地代を資本家的農業経営の成果としての剰余生産物の分け前としてもらうのである。これは大きな変化である。

もちろんその過程には、イギリス革命がある。二度の激変がある。そしてそれは事態の変化をいっそう促進させた<sup>(1)</sup>。テューダー王朝は、それまでの派閥抗争のあと、大貴族の地方権力の力をそぐため、ジェントリ階級

の拡大をむしろ役立てた。マクナリー (McNally, *Ibid*, p. 8) によると、十六世紀の後半には、下院は定員三百人から四百人に増員され、議員の中にも占めるジェントリの割合は増加し、50%から75%に拡大したといわれる。テューダー王朝はこのジェントリの力を借りて大貴族との均衡を図っただけでなく、その力にますます依存するようになったのである。そしてその結果が、イギリス王権の弱体化であり、専制からの後退であり、土地所有者の政治的権力の増大であった。

- (1) 「新しい資本家的農業経営者階級が存在し、強力に前進しようとしていたが、封建時代の遺習に妨げられ、これを廃止しないかぎり、自由に発展することができなかった。この階級は、革命に際して都市のブルジョアジーと同盟して国家権力を掌握し、より以上の勢力拡張を可能とする諸条件を作り出したのである」(C・ヒル、田村秀夫訳『イギリス革命』28頁)。

これに対して、十七世紀初頭からのステュアート反動は、イングランドにおける専制的な王権を再構築する試みであったといえよう。イギリス革命は、一方で、アングリカンニズムに対するピューリタンニズムの対立であるが、他方で、それは絶対主義に対するジェントリ地主の反抗と見るべきであり、それ以前の百五十年にわたって獲得されてきた自由への権利の防衛とみるべきかも知れない。もちろん王権に対するこのような反抗が、より低い身分の大衆に反抗の火をつけるかもしれないとして、それを絶対主義よりも危険だと見たものもいらないではなかった。それでもジェントリ地主のかなりの部分は、革命には反対しつつも、絶対主義には敵対的であった。だが革命の急進化を恐れた彼らは、最終的には行動の実現よりも王権との妥協を望むことになった。とはいえ、革命の主力が議会派から独立派に移ることによって内乱は過激化した。

クロムウェルに導かれたその革命は、それが抱く急進主義によって、王党派のみならず、革命に加わった一部ジェントリを含めて、それまでの裕

福な階級に脅威を与えた。王政の廃止、上院の廃止、国王の処刑、新しい軍隊の編成など大衆的な急進主義は、彼らにとって伝統的な社会秩序の破壊として映り、王政復古と上院の復活を望むようになったのも当然であつたろう。議会派内部の対立抗争を繰り返しながら、独立派と平等派は結束して共和制に持ち込むが、やがてその軍事独裁が国民に嫌悪され、王党派との妥協が成立することになる。しかしクロムウェル派に対する報復政策は、彼らの土地を没収して、再びもとの地主に返還させるということだったので、以来、旧領主や上層ジェントリが大土地所有を維持、拡大することになる。このイギリス革命といわれているものが、直接意図しなかったにせよ、結果的にはイングランドに農業資本主義を浸透させる動きになったことは明らかであろう。

だが1660年に王位についたチャールズII世は再び絶対主義政策をとろうとしたとき、ホイッグ過激派の反対にあう。議会を解散したチャールズII世は混乱を恐れてさまざまな策動を繰り返すが、議会を再び召集することはなかった。しかし次に即位したジェームズII世がますます王権を乱用するので、それへの批判は高まり、結局その動きはジェームズII世が廃位されることによって頂点に達した。ジェームズII世はフランスに逃亡し、王位は空位になり、オレンジ公ウイリアムとアンが王位につく。これが1689年の名誉革命であり、ここに立憲君主制の成立を見ることになる。

国民の関心と王政が合致した1688年以降、大土地所有者はさらに土地の囲い込みに専念した。その頃すでに、百エーカー以下の農地の割合が減少し、百エーカー以上の農地の割合の急速な増加を見たといわれる。これによって地代は増加したが、そこには囲い込みによる集中効果と農業技術の改良による生産性の向上があった。それはさらに囲い込みを誘引した。形式的には、法に則ったとしても、事実上、貧しい農民に対する地主たちの暴力的な収奪行為である場合が多かった。以後囲い込みは議会による法律的承認の下に、議会的囲い込み運動として十九世紀前半まで続くのである。

この囲い込みは、マルクスの『資本論』における原始的蓄積の説明で、それが産業革命以降の機械制大工業に賃金労働者を供給する源泉とされており、宇野もそれを継承しているが、初期の囲い込みでは、土地から放り出された無産民の大部分は、もっぱら農村にとどまっていたように見える。確かに共同地などの消滅によって共同体の紐帯はかなり失われたとしても、大農場経営や農業技術の発展、そして農村における工業の発展で、農村にも雇用の機会は逆に増えてきたからである。そして逆に、都市の大工場はまだ存在しなかったし、イングランドにおける人口の急激な増加が始まるのは、まだ先の話であったのである。マルクスが述べているように、彼らが「群をなして乞食になり、盗賊になり、浮浪者になった」という事実は否定できないにしても、それを過度に一般化することは出来ない。牧羊地では確かに耕作地より人は減ったとしても、その整備や垣根作りには労働は必要であり、共同地や荒蕪地の開墾にも人手を要したのである。さらにノフォーク農法などの導入による農業技術の改善も農村の雇用を拡大したといわれる。エンクロージャの時期を通じて農村の人口はむしろ増えたようである。とはいえもちろんそれは、土地を失って無一文になり、自らの労働力を売る以外に生活の手段を持たない「二重の意味で自由な」賃労働者を作り出す決定的な歴史的過程であることを否定するものではない。無産民が工業プロレタリアートとしてまだ登場する機会はなくても、農民の一部はすでに農業プロレタリアートに変わったのである。事実、そういう中から農村での地主、借地農業者、農業労働者からなる三肢構造が形成され、労働力の生み出す剰余を土地所有者と資本家とで分け合う農業の資本家的経営が次第に普及してくるのである。当時、最も主要な産業であった農業生産においては、資本家的経営が支配的になりつつあり、結果として「十八世紀中葉には、農村社会の三層構造がイングランドの特徴となっていた」(P・マサイヤス、小松芳喬訳『最初の工業国家』65頁)といわれるほどだった。

しかしながらこの農業資本主義は、マクナリが注意しているように、

「その登場が伝統的な慣習によって抑制されていた」(McNally, *Ibid.*, p. 12) ののであって、地主だけでなく、小作人や農業労働者も伝統的慣習に執着したのである。したがって農業資本主義の成立の過程は何世紀にもわたって共同体を巡る社会的対立と暴力の行使の中で推移してきているのであって、最終的に土地所有権が確立し、地主、借地農業資本家、農業賃労働者からなる三肢構造の農業資本主義が明確な確立をみるのは十八世紀にはいつてからといつてよい。もちろんその間は、国内市場の拡大、成熟の過程でもあった。それだけではない。十八世紀の前半に、イギリスの農業生産の生産力の向上は、たんに国内市場を拡大しただけではなく、小麦の輸出を二倍にしたといわれる。農業生産物の輸出は当時はまだ工業製品の輸出を上回っていたのである。ただ農業生産力の上昇は同時に穀物価格を低下させた。それは実質賃金の低下を意味したので、工業への雇用を刺激した。イングランドにおける農業資本主義の発展は工業生産とその市場をも拡大する効果があったのである。

もちろんブレンナー流にえば、むしろ時代を先取りしてゆくようなそういう市場の拡大こそが、封建的領主から近代的な商人的地主に変貌するきっかけであったのであり、そのことによって自立して地代を払い借地を拡大してゆく借地農の利潤への依存から、イングランド農業における資本家的経営が始まったのである。すなわち小農が減少し、自給自足的な家族経営が衰退して、専門化が進むと、それぞれが消費するもの、とりわけ食料を外部の市場に求めざるを得ないので、相互に影響しつつ市場は拡大して行くのである。また農業の専門化がさまざまな工業製品への需要を拡大し、工業製品の市場も拡大してゆくのである。海外からの製品あるいは原材料の輸入を含めて、商人資本の活躍がそれをさまざまに媒介していることは言うまでもない。また生活環境の向上もあり、十八世紀も後半になると人口も爆発的に増加してくるので、農業プロレタリアートも工業の発展に十分対応してその供給を可能にするほどに増えたのである。以前からすでに農村の中にさまざまな工業が、家内工業やマニファクチュアの形で



形成されていて、労働者もそういうところに雇用を拡大していたが、やがて十八世紀末から新しい綿工業の成立と産業革命を契機にして機械制大工業が形成されて新しく都市を形作ることになると、労働者の雇用は飛躍的に促進され、市場もますます拡大して、資本家的生産関係の一般的な成立をみるにいたるのであった。

もちろんそういう展開を商人資本が支えていたことは明らかであり、国際貿易と国内市場を結ぶそのような商人資本の働きこそが、さまざまな工業生産の拡大と市場の拡大に貢献していたことに間違いない。当然、その商人資本は毛織物にのみ関わっていたわけではない。当初、未完成の羊毛製品の輸出に依存していたイングランドがやがて十七世紀末までにはすべて完成品の毛織物の輸出に転じ、一時不振におちいったその輸出市場もレバントなどに拡大を見せるが、同時にその頃から工業製品やタバコ、砂糖、綿布などの輸入品の再輸出が増加し始めたために、毛織物の輸出は割合としては急減した。そしてアフリカから奴隷を西インドへ、西インドから砂糖をイギリスへ持ち帰り、そしてイギリス本国を經由してヨーロッパに輸出される、いわゆる三角貿易は、イギリス経済にはじめて安定した基盤を与えることになるのである。この時代の支配的な資本形態が商人資本であることは間違いない。ただそれが宇野のいう「商人資本としてのイギリス羊毛工業」であったというわけではないであろう。自国の生産品であるか輸入品であるかを問わず、そのようなさまざまな商品の流通を市場を通じて結びながら、はじめインドからの製品の輸入、次にその原材料の輸入を通して、流通の拠点に重ねて生産の拠点である木綿工業を立ち上げて、やがてそれが「世界の工場」として機能し、世界市場を編成支配するようになると、商人資本は今度は逆にその産業資本に従属する側に立つことになるのであるが、その際、産業資本に対する機械リース業者としての商人資本家や地主の支配力が増してくる側面があることも忘れてはならないであろう。

もともと羊毛工業が木綿工業に直結することはない。羊毛工業は依然と



して小規模の産業として残り、新たに機械制大工業として次の時代を担うのは木綿工業であり、原料を外国に依存しながらそれを加工し製品に仕上げて、その製品を国内で消費することはもとより、外国にまで輸出する木綿紡績・織布の産業に他ならない。それも本来は、世界市場の展開の結果として出てきたある種の副産物でもあったのである。いわゆる資本主義の重商主義段階の歴史的過程の推移は、おおよそそのように描くことが出来る。そしてまさに、本来的な社会的生産の中枢を担う農業が、やがて自らを実質的に包摂することになる資本家的生産様式を、形式的にしる先行的に導いたのである。マクナリは言う。「イングランドは近代資本主義へのフロンティアを乗り越えた。とはいえ農業資本主義はそれを乗り越えてきた大きな船であったのである」(McNally, *Ibid.* p. 15) と。

#### 4

封建制の崩壊から資本主義の成立にいたるイギリス経済史の概要を今まで述べてきたが、それを前提した上で検討を続けていきたいと思う。

まず問題にしたいのは、宇野が「各段階において指導的地位にある先進資本主義国における、支配的な産業の、支配的な資本形態を中心とする資本家的商品経済の構造を、いわゆる『ブルジョア社会の国家形態での総括』としても、世界史的に典型的なるものとして、その国家形態自身も、また『国際関係』も、この発展段階に応じて変化するものとして、説明するものとなる」(『宇野弘藏著作集』九、53頁)という言葉で考えていることの意味である。「支配的な産業」を取り込んだ「支配的な資本形態」が、どのように、それぞれ「各段階」で、「変化するものとして」の「資本家的な商品経済の構造」を形作っているかが、そこで説明を問われているものといってよいであろう。中心にあるのは各「段階」を超えた共通項として想定されている「産業」の存在である。その代表的なものをそれぞれの資本形態が「各段階」で、どのように包摂するかが問題であ

る。そうだとすると、それは宇野が「重商主義段階」論で具体的に「商人資本としてのイギリス羊毛工業」として説いている商人資本形態が、支配的な産業を包摂していることになるのであろうか。それが重商主義段階の「支配的な産業」を支配する資本形態だということになるのであろうか。

すでに見たように、宇野はそこで問屋制家内工業の内部で、商人資本による生産者に対する収奪が行われていたことを説いている。「中世紀の商人資本のようにギルド職人の外部にあったものではなく、また後の産業資本の時代の商人資本のように産業資本の支配に影響されて商業資本化しつつあったものでもなく、資本主義の発生期の資本の蓄積として当然に小生産者の収奪の過程を主として行なう資本である」(『宇野弘蔵著作集』七、61頁)というのが、宇野の主張である。ただその「収奪」という意味は必ずしも明確ではない。イングランドの羊毛工業は、十六世紀まではもっぱら紡績に従事し、それを商人が買い集めて未製品として外国に輸出していたのであるが、十七世紀以後は、自ら織物として製品化してそれを商人が市場に出し、または外国に輸出するようになった。そのためには織匠といわれるクロージャーが羊毛を買い付け、農村の女子に紡がせて、さらにそれを織工に織らせて、場合によってはそれを加工仕上げするという過程が必要になる。そのクロージャの性格がイングランドの西部地方と北部地方とでは違っていて、西部の方は外国貿易に携わる大商人を含む商人資本がそれであり、北部の方では製品を自ら作って商人に販売する独立自営の生産者がワーキング・クロージャーとして現れているという状況であった。したがって事情は一概には定められないが、多くのクロージャが家内工業を中核とするその生産にいろいろ注文はつけられても、生産過程自身には直接関与できなかったことは確かである。生産過程で労働しているものは、紡績では農村の女子が大部分であったが、その労働が長時間にわたり、支払われる報酬が安かったことは事実であったとしても、それが賃労働であり、労働力の販売の対価としての賃金であったとは直ちにはいえない。また織布は織布工自ら行ってクロージャから報酬をもらうことがほと

んどで、職人、徒弟もその下で特定の仕事に従事して親方である織布工から報酬をもらうことになるが、彼らが賃労働者であるとは同じく直ぐにはいえない。仕事の時間も不規則で定まらず、規律もなく自由に気ままな働きである場合が多かったから、労働力の売買とはいえ賃労働という概念からは遠かったといってよいであろう。それが「十七世紀から十八世紀にかけての商人資本のもとに漸次に形成せられつつあった資本家的社会関係は、手工業者を賃銀労働者化し、また部分労働者化しつつあった」（同上、60頁）という表現に見られる資本家的社会関係の形成に当るものなのかどうかを判断するには、商人資本による「収奪」とそれがどう関わるかの問題が解決されなくてはならない。収奪と搾取とはその範疇を異にする概念だからである。宇野は、一方で「産業資本」が特殊に商人資本による生産過程の間接的な支配としてこの段階では現れていることを説こうとするが、他方で、商人資本の利潤は詐取をも含む売買差額にあることを忘れない。宇野も、「商人の下に行われる家内工業は同一資本家の資本として種々なる生産過程を経過しながらなお商品形態の性質を残している。賃銀として支払われる加工賃は商人的に安く買って高く売る形式を脱しないのである」（『経済政策論』上、1936年、『宇野弘蔵著作集』七、299頁）と旧版では述べている。過渡期としてそれを説こうとしても、宇野の説明には曖昧さが残ったままである。ただ宇野にとっては、どうしてもそこに重商主義段階において「産業資本」が存在していなければならなかった。段階論がもともとそういうものとして考えられていたからである。そしてそういう理解の底には、「資本形態自身が生産過程の中に入ってゆく過程を示す」（同上、九、366頁）試み、つまり資本がどのように生産過程を取り込んでゆくかを明らかにする試みがあったのかもしれないが、それを問屋制家内工業における資本家的社会関係の成立というところから導くのはもともと無理だったのではないか<sup>(1)</sup>。事実、宇野によるも、商人資本の支配は、その後の産業資本の登場によってその根拠を失ってしまうのである。

- (1) 大内力は、宇野と違って問屋制家内工業でなくマニファクチュアの中に産業資本の「萌芽」を見ていたようである。すなわち次のように述べているからである。「マニファクチュアは資本主義的生産様式のもっとも初期的な形態であるが、この場合それが資本主義的生産様式とされるのは、ここではすでに生産過程が資本のもとに包摂され資本の生産過程＝価値増殖過程として現われることになっているからである」(『大内力経済学大系』四、83頁)と。

それなのになぜ宇野は、資本主義的生産の導出を問屋制家内工業に、あるいはマニファクチュアにこだわって考えているのであろうか。なぜ商人資本が支配的であることを、産業としてはすでに支配的でなくなりつつあった特定の羊毛工業に結び付けようとするのであろうか。また、なぜ当時最大の産業であった農業は、初めから問題にされていなかったのであろうか。その点については、宇野理論に学びその方法論を学問的前提としている R・アルブリトンが次のような興味深い解説を加えている。すなわち、「重商主義段階において、羊毛製品を作る問屋制はけっして支配的でないし最も重大な経済変数ではない、といえるかもしれない。やはり経済はまだ農業が支配的であり、地主が全国富の圧倒的過半を保持していた。段階論が主張しているのは、資本蓄積が存在しているかぎり、その最も典型的な資本主義的形態は問屋制制度である、ということだけである。……段階論の見地から重要なのは、問屋制が経済的により重大である (GNP により大きく寄与している) というのではなくて、一組の生産関係としてそれがより資本主義的である、ということである。段階論は基本的に形態分析であり、最も資本主義的形態を概念化する。これに対して歴史分析はより経験的であり特定の事件や変化を説明する際に最も意義のある経済変数に関心がある。重商主義段階の異なる時点で、あるいはこの段階の全期間にわたってさえ、半資本主義的に経営される農場が、問屋制よりも GNP に寄与したということは可能である。しかし資本蓄積のシステムとしてそれは問屋制よりも資本主義的であったであらうか。これが段階論の

レベルでなされる形態分析の類が提起する根本問題なのである」(アルブリトン、永谷清監訳『資本主義発展の段階論』74～75頁)。イギリス羊毛産業を採るのは、宇野も段階論に限って認めていた M・ウェーバーの「理想型」(Ideal-typus) の考え方に近いのであろう<sup>(1)</sup>。言おうとしている意味は分からないではない。しかし重商主義段階の前期であればともかく、後期になればもっと多様な産業が商人資本と関係するだけでなく、いわゆる三角貿易として自国の製品に関係なくイングランドはその商業活動を通して外国の製品の輸出入により莫大な利益を得るようになってくるのである。商人資本が羊毛工業を代表して資本蓄積を行っているようにはなっていないのである。商人資本を時代を先取りするような望ましい典型(Ideal-typus)として羊毛工業に集約することは出来ないし、また特定の産業を典型にしえないような状況が、むしろ商人資本の支配するこの時代の特徴ではなかったかと考えるのである。

- (1) 「政策論が段階論的規定として展開する場合には、ややウェーバーの理想型に類似したものが認められるといってもよい」(『宇野弘藏著作集』, 七, 45頁)。

したがって、以前にも述べたことであるが、宇野の理解の底には『資本論』の相対的剰余価値論の展開の中の、「協業」、「分業とマニファクチュア」、「機械と大工業」の概念的な展開を、資本家的生産様式の生産組織における歴史的展開と重ねあわせてみる視点が——自ら否定していたはずの視点が——なお隠されていたのではないだろうかというのである。大塚史学においては資本主義の誕生を農村の羊毛工業のマニファクチュアからの自生的な展開と見ていた<sup>(1)</sup>。まったく極端な理解というほかないが、それも同じくマルクスに依拠しようとしたものであった。しかし前にも指摘したように、毛織物工業はその生産関係がそのまま綿工業に継承されるものではない。むしろ木綿工業は羊毛工業のいわばライバルとなった木

綿・麻混紡のフェスティアン織から出発している。それらは時期にずれはあるものの、世界市場編成の中で別々の展開を遂げてきている。問題は綿工業において確立をみた資本家的社会関係の成立である。その成立の経路が、問屋制的支配の下での家内工業の中からか、それとも農村の工業マニユファクチュアからかは、どっちにしても実は関係がないのではないか。むしろ、資本家的農業経営の成立は実はそれに先立っていたし、そこで形成された地主、借地農業資本家、農業労働者の新しい社会関係が、産業革命後の綿工業などの大工業の中に移植され、「資本による労働の実質的包摂」として、そこではじめて一般的に資本家的生産様式が明確に位置づけられることになったのではなかったか、私はそう理解するのである。マルクスも、『『範疇的』な意味では、借地農業者も工場主と同じに産業資本家である』（『資本論』第一部、『マルクス・エンゲルス全集』版訳、23-b、979頁）と述べている。そのような見方からすれば、産業資本も農業ですでに成立していることになる。それはそれで間違いではない。ただその場合でも、それはいわば「形式的な包摂」に過ぎない。農業に成立した資本・賃労働関係はまだ「実質的に」社会的生産を「包摂」したとはいえない。それは古い生産力のままであり、共同体的慣習はまだ残っている。ただ、いずれにしても人間の社会的再生産を基本的に担う農業において、新しい社会関係の成立を見たことは重要である。問屋制家内工業にしても工業マニユファクチュアにしても、農業という基本的な社会関係にとってはまだ補足的なものに過ぎなかったからである。だから農業をも自らの再生産過程の内部に包摂して成立する機械制大工業の時代になって、初めて産業資本は社会的生産を「実質的に包摂」し、それを全面的に担う体制になることが出来たのである。もっともそれはあくまでも理想的にであって、現実には、そのときイギリス資本主義は、農業を自らの再生産過程の外部に押し出して、自らに有利な条件で商業を通じてそれをイギリスに従属させる道を選んだのであった。安価な穀物の輸入を目指して穀物条例の廃止を主張する十九世紀半ばのイギリスの論争が、このことに関わるものであ

ったことは、ここでわざわざ指摘するまでもない。

- (1) 大塚史学では、農業の資本主義化も工業の場合とちょうど同じように、農村の独立自営農民であったヨーマンの両極分解によって説かれる。ただその細部はその論者によって異なるが、ここでは椎名重明の所説を挙げておく。「国内羊毛工業の展開とそれに対する領主的対応＝牧羊大エンクロージャーとを前提としてあらわれた、国内経済の新たな発展に対する農民的対応＝農民的・小ブルジュワ的エンクロージャーこそ、イギリス農業資本主義化の——したがってまた上述の牧羊大経営が資本家的経営に転化する——基点であったといわなくてはならない」（椎名重明『近代的地土地所有』東京大学出版会、1973年、42頁）。

ところで宇野は自らの重商主義段階論の研究においてマルクスの「原始的蓄積」論に学んだという。ただ『資本論』の原始的蓄積論の叙述を見ると、その第四節に「資本家的借地農業者の生成」があり、第五節に「農業革命の工業への反作用 産業資本のための国内市場の形成」、そして第六節が「産業資本家の生成」となっているが、宇野のこの箇所への関説はほとんど見られない。もちろん宇野は土地囲い込みによる無産民の形成が将来の工業プロレタリアートの存在を担保するものであったことを強調はしている。それが原始的蓄積論の焦点であることに間違いはない。ただわずかに触れられている宇野の理解では、十六世紀にイングランドで裕福な資本家的借地農が出現したとマルクスが言っているが、「これで直ちに農業が資本主義化したというのではない。それはなお数世紀を要する過程をとおして実現されるのであった」（『資本論入門』、『宇野弘藏著作集』六、246頁）というのである。宇野にとってイギリスでの農業における資本主義の成立は十九世紀なのである。つまりそれは産業革命後の話なのである。マルクスが見落していなかったイングランド農業における十六世紀から十八世紀までの長期にわたる土地所有構造の変化に基づく農業の資本主義化の進展の事実には宇野は留意をみせないのである。



宇野の場合、重商主義段階というものを、「商人資本としてのイギリス羊毛工業」という形での産業資本の先行的な成立を条件に、資本主義の一つの発展段階として設定するところにもともと無理があったのではないか。不十分でも一応独立して生産を営んでいる家内工業を問屋制的に商人資本が間接的に支配していることをもって、そこでの資本家的生産関係の成立あるいは産業資本の成立を導くのは土台無理である。むしろ資本主義というものを産業資本の成立と考えなければならないならば、重商主義段階は産業資本主義の成立を準備する前資本主義段階として規定すべきではなかったのか<sup>(1)</sup>。またもし原始的蓄積過程を重商主義段階の支配的な蓄積様式とするのであれば、それは資本主義の側の自立的蓄積ではなく、いわば外部的な政治的強力による蓄積と宇野は理解しているわけだから、そう規定せざるをえないのではないか。そうであれば無理に産業資本という存在をおく必要もないし、資本・賃労働関係が羊毛工業において成立をみた、と強弁する必要もない。「収奪を含む売買差額の取得」という言葉で済むはずである。だからそれは文字通り商人資本の活躍した資本主義の初期の時代として、各種の小生産企業を商人資本が間接的に支配しながら内外の商品生産の市場を連結拡大し、その利潤をもって資本蓄積を推進するとともに、さらに自ら意図したものではないが、商品経済の拡大を通して土地所有者を商業的地主に変え、土地から追放された労働者の形成に関わり、旧来の土地所有のくびきを脱した農業をもその全体として市場の中に取り込み、いち早く農村において、借地農業資本家、賃労働者と近代的地主からなる資本家的生産様式の導入を助け、さらに大地主や大借地農の各種の資本投下を推進する経済環境を整える役割を果たしたところに、過渡期としてその特徴を置くべきではないか、と考えるのである。

- (1) スウィージーは、周知のように、封建制から資本主義への「移行論争」において、「前資本主義的商品生産」という範疇を、独自の社会体制とはいえないが過渡的な形態として、設定したことがある。これは確かに、フ



イッシャーも言っているように、「十六世紀と十七世紀前半とはマルクス主義者によってもやはり、かなり面倒な時代なのである。封建制度は資本主義によって打倒されたというのが、マルクス主義者の教条の一つである。だが、封建制度は十四世紀の終わりごろに崩壊の状態に進んでいたのに、資本家の時代はずっと後になるまで始まったとはいえないということが、やはりマルクス主義史家によって広く認められている」(F.J.フィッシャー、浅田実訳『十六、七世紀の英国経済』15頁)という事情に関係しているといつてよいであろう。

但し、その場合、「商人資本としてのイギリス羊毛工業」に代えて、イングランド農業における資本主義の成立をもって資本主義の初期段階を代表するものとするのには躊躇以上のものがある。もちろん段階論という枠組みで、それを支配的な産業として規定するか、という意味においてであるが、その理由には農業という産業が資本家的生産にはなはだなじみにくいものだということもある。十七、八世紀においては案外資本家的経営に適応できたのかもしれないが、土地や天候に代表される自然的制約、また不可避とする共同体的困縛、あるいは農業における労働者の需給関係の調整の困難さなどの理由によって、資本による実質的包摂の典型例にはなかなか至らない性質があるように思われる<sup>(1)</sup>。マルクスも宇野もそれに気づいている<sup>(2)</sup>。実際、現在でも先進国で農業における資本家的経営は必ずしも一般的なものではない。

- (1) 「資本主義的農業は、その種の生産者的な用語では簡単に定義できない。言ってみれば、封建的農業からも区別しにくいものなのである。それは少なくとも次の二つの理由による。第一に、農業で生産性を上げてゆく方法は、工業のそれと比べて、それを実現してゆくことが歴史的に言っても、はるかに難しい。そしてそれが起こった時であってさえも、資本集約的でないことがしばしばであった。第二に、食糧生産は、商品生産システムに移行するのに、工業生産の場合よりも、農村の不穏と食糧暴動の歴史が示すように、はるかに抵抗が大きかった。このことを記憶にとどめ、さらに賃労働の使用を通して剰余を搾取するというのがその本質的な特徴でなけ

ればならないということを認めた上で、資本家的農業の現実の特徴を構成するものを何か思いつかせることができるだろうか。二つの追加的な明確な特徴が、資本家的農業のシステムが存在するにいたるその歴史的瞬間を示すために重要と思われる。その一つは、食糧生産が適切に商品生産の形態になっていること、つまり完全に商品生産のシステムに入っていること、そしてその二つ目は、食糧供給の時期が適切で、慣習的な社会的な支配に関わりなく分配されるということ、である。……この性格上、そのような変化は、工業活動に適用される生産方法における変化よりも、ずっと長く続くことがありがちなことのようなのである」(David Ormrod ; *English Grain Exports and the Structure of Agrarian Capitalism 1700-1760*, Hull University Press, 1985. p. 12)。

- (2) マルクスも、例えば次のように述べている。「資本主義体制は合理的な農業の妨げになるということである。言い換えれば、合理的な農業は資本主義体制とは両立せず、(後者は前者の技術的發展を促進するとはいえ)、それは自分で労働する小農民の手か、または結合した生産者たちの統制化を必要とするということである」(マルクス『資本論』Ⅲ, 『マルクス・エンゲルス全集』25-a, 153頁)。

確かに、十七世紀に農業に資本家的経営が普及化していったとしても、そこには依然として古い慣習と秩序が残されていて、古い共同体の関係が農民のあいだだけでなく、土地についての地主と資本家との関係にもあいまいな部分を残し残し、さらにまた新しい資本主義的雇用関係が古い親方・徒弟の関係の中に埋没させられてあいまいになっているという事実があった。その点では問屋制家内工業でも工業マニファクチュアでも生産の内部の事情は似ているかもしれない。また農業労働者が多くはパートタイムで農村の家内工業で働いていたという現実もある。農村で農奴制が解体されて久しいとしても、共同体の規制はあらゆる分野で強く残っていたことも確かである。現実には、地主、借地農業資本家、農業労働者もその中で、それぞれの役割分担にはっきりしない境界部分を残していることもある。たとえば地主、資本家のいずれが農業のどの部分への投資を担当するかというような問題についてである。したがって、また、学説史的にも、

地代と利潤の範疇的区別が厳密になるのは、大分あとの話である。

ただそれにしても、新しい社会関係が農業というもっとも基本的な経済領域で出来上がったということは重要である。確かに大農場で多数の労働者を使って集約的に農業労働を行わせることで、農業の生産性は向上したのであろう。それはその時代には適合的であったのであろう。そしてしかも、土地という最重要な生産手段を持たない借地農こそが、企業家としてはもっともよく資本家的な経営者を演じえたのではないかと考える時、そのような農村に生れた資本家的支配の様式が、綿工業に容易に浸透して急激に発展する一般的な可能性を持ち、資本主義の社会的な成立に導くことが出来たのではないかと思うのである。

もちろん農業における資本主義化の過程と比べて、工業における産業資本への転化の過程は急激であった。それに機械の使用による生産性の上昇は劇的であった。ただその前段階の世界市場の展開と商人資本の活動およびそれを支える金融市場の形成が、世界市場の中心に生産の拠点を据えて資本主義的生産の組織化を可能にしたところに、その急速な成功＝産業革命に至る道筋を可能にした理由があるといわなくてはならないだろう。イングランドの綿工業自身が地主の資金援助あるいはそれを制度化した地方銀行などによる外部資金の提供などを受けながら成立している可能性を考えれば、その道筋はさらに理解しやすいであろう。実際、マサイアスも次のように述べている。「直接にせよ間接にせよ、農業部門が産業革命以前に経済によって生み出された貯蓄に一つの部門としては最大の貢献を与えたことからすれば、土地からの資本のフローが決定的なものであった。地主の地代収入と農業経営者の利潤が、農業そのものへの投資と同時に、農業以外（特に輸送）への投資のための資本を提供したのである。多くのヨーロッパ大陸諸国に比べて、イングランドの地主階級がこれら経済的に生産的な方面に投資することに大きな意欲を示したこと、イングランドの農場経営者の投資能力が大きかったこと、そしてまたイングランドにはこのような利潤を得られる投資機会が多かったこと、実際これらが非常に重要

なものであった。地方銀行制度が農村地域の貯蓄をさらに広範に引き出しはじめ、また農場経営者や地主がその収支残額を退蔵しておくよりも銀行に預金するようになると、地主部門による投資が、かなり広範に広がっていた交際範囲によって補足されるようになった」（マサイアス『最初の工業国家』69～70頁）と。そしてさらに、「イギリスは農業生産物に恵まれ、外国貿易も繁栄し利益を生んだ。……土地所有と農業によって生じた富とが、土地や交通の改良のための投資へ流れ込むような直通の導管が多数存在していた。そして一方では、外国貿易に携わる商人がその資本と信用とをもって工業に出資したり、国内商業を営む商人がみずから製造業に着手したりすることによって、商業によって得られた富も工業へと流れ込んだ。1750年を過ぎると、銀行制度も貯蓄をより広い範囲に動員しはじめた。貯蓄に対するその他の新しい需要が出てきてその充足に成功したことも、このようななりゆきに拍車をかけるのである」（同上、154～155頁）と述べている。

フランスと違い、イングランドの地主は早くから利益にさとい商業的地主であり、投資には意欲的であった。資本主義化の道筋は、もともと農奴制を解体する商業化・市場化の歩みであり、封建的土地所有制度に代えて土地私有権を確立してゆく過程であり、その中で大商人、金融業者が新しく地主に加わり、土地の囲い込みなどを通じて大土地所有者となり、その地代増収の意欲がさらに利潤増加をもくろむ大借地農業者を導き、またそれが土地を失って自らの労働力を売る以外に生活できない無産民を生み出す動機にもなり、さらに勃興するさまざまな産業を支援することを通じて商人資本は資本蓄積を重ねて、やがて産業資本として投資された綿工業と鉄工業を両輪として世界市場を制覇してゆく行程に他ならない。

宇野は十七世紀以降の、イングランドにおける農業の資本家的経営の拡大に触れることなく、問屋制家内工業や、マニュファクチュア工業の中のみ産業の発展を見て、それをたとえば「商人資本としてのイギリス羊毛工業」というような形でとらえたために、重商主義段階の資本蓄積を商人

資本の蓄積としてみるのがせいぜいであったように思う。しかし重商主義段階といわれる時期は、同時に、農村を巻き込んだ市場の拡大であり、農業における階級の三分化に基づく資本主義化の過程であったために、それは一方で、土地を失った無産労働者の形成を大いに促進し、他方で大土地所有や大借地農の出現を通して、農業部面での地代や利潤に基づく資本の蓄積を押し進めることを可能にし、またそれが金融制度の確立を準備して、生活の基幹部分の生産を手中にした産業資本による資本主義社会の成立の環境を作っていたことに間違いはないように思う。大規模なマニュファクチュアという例はもちろん資本主義生産の原型を提供するものではあるが、一般的に言えば、土地という基本的な生産手段を持たない借地農業資本家こそは企業資本家としての機能を持ち、後の産業革命における主役となる資本家の原型となったものではないかと思われるのである。

宇野が、封建制から資本主義への移行に際して、「最も重要な問題点」は「商人資本の役割をいかに評価するかということにかかっている」(『宇野弘蔵著作集』九、358頁)と言った意味は、そう理解することによってかえって生きてくるのではないか。商人資本が支配的であったというのは、それが問屋制家内工業をかかえて間接的ではあっても実質的に生産を支配して先行的に産業資本に変貌するというのではなくて、商人資本が商人資本として海外貿易や国内交易に従事してその利益を蓄え蓄積を重ね、さらに、それによって土地の近代的所有権の確立を通じた農業の資本家的経営が普及して、大土地所有者や大借地農業資本家が地代や利潤による資本蓄積をすすめることで、生産過程を資本の生産過程として立ち上げることを可能にするような時代を準備する役割を果たしたということなのではないだろうか。重商主義の時代というのはそういう時代ではなかったか。実際、マルクスがすでに指摘していたように、農業の資本家的経営の導入を通じて、あるいは一部巨大な工業マニュファクチュアなどにおいても、「資本による労働の形式的包摂」は準備され、生産力の向上を媒介とする「資本による労働の実質的包摂」の時期は、まさに真近に迫っていたので

ある。

宇野自身次のように述べていたことがある。すなわち、「重商主義の経済政策は、かくて二世紀にわたるイギリス資本主義の発生期を通して、その方策を変化しながらも、結局、いわゆる資本の原始的蓄積を商人資本によって促進する手段として役立ったのである。……しかしそれは決して商人資本がそのことを意識して行なったわけではない。新たなる産業資本の時代は、商人資本にとってはいわば思わざる結果として展開されたのであって、資本主義的生産方法の確立とともに自らその支配的資本としての根拠を失い、重商主義としてのその政策自身も資本主義の成長に対しむしろ負担をなすものとして否定されつつ、産業資本の支配を実現するのである」（『宇野弘蔵著作集』七、72～73頁）と。実際、産業資本の登場によってその本質的意義を失うところに商人資本としての歴史的役割があったのである。とはいえ地主は商人資本ではない。農業部面での生産の拡大が商品市場の拡大につながり、その限りで商人資本の活動に大きな機会と場を与えたことは事実であるが、その農業部面での蓄積と投資は、産業資本の登場によって消滅もしないし、その役割を産業資本の蓄積に譲るものでもない。つまり土地所有は資本の外部にあり、しかも農業資本は産業資本そのものであり、その利潤もまた産業利潤であるからである。農業に投ぜられた資本は社会的生産の一部を担うものとなるのである。

そうなると「商人資本としてのイギリス羊毛工業」を基軸とする宇野の重商主義段階論というものについて、いささかの再検討が必要になるのではないだろうか。もちろんそこでの説明がすべてが誤りだということではない。しかし少なくとも産業資本主義の初期段階というよりも、産業資本の確立を前提とする、その前段階として商人資本の支配の意味とその構造を明らかにするとともに、農業の先行的な資本主義化の事実とその歴史的意義を指摘しておく必要はあるだろう。ただ段階論そのものの検討も含めざるをえないとしたら、これ以上の積極的な展開は次稿に譲るほかない。

(追記) 本論文を執筆するにあたって、ある研究会で概要を発表したが、その折さまざまなご論評を頂いた。とりわけ柴垣和夫（東京大学名誉教授）、加茂川益郎（敬愛大学教授）、清水敦（武蔵大学教授）そして新田滋（茨城大学助教授）の諸氏から頂いたご懇切なご指摘に感謝したい。また原稿を読み、その論旨および叙述方法から誤字脱字まで、巨細にわたりご批判ご教示を頂いた弘前大学の鈴木和雄教授に感謝の言葉を捧げる。その外ここにいちいちお名前を挙げなかった諸氏を含め、賜った真摯な学問的友情に心からお礼申し上げる。但し、言うまでもないが、本論文についての責任は一切私の負うものである。

#### 〈参考文献〉

- Albritton, Robert ; *A Japanese Approach to Stages of Capitalist Development*, MacMillan Academic and Professional LTD, London, 1991. 永谷清監訳『資本主義発展の段階論』, 社会評論社, 1995年
- Brenner, Robert ; *Agrarian Class Structure and Economic Development in Pre-Industrial Europe*, in, *The Brenner Debate*, ed.by T.H.Ashton and C. H.E.Philpin Cambridge University Press, 1985.
- Brenner, Robert ; *The Agrarian Roots of European Capitalism*, in, *The Brenner Debate*.
- Clapham, John Harold ; *A Concise Economic History of Britain*, Cambridge University Press, 1949. 山村延昭訳『イギリス経済史概説』, 未来社, 1981年
- Dean, Phyllis ; *The First Industrial Revolution*, Cambridge University Press, 1965. 石井摩耶子・宮川淑訳『イギリス産業革命分析』, 社会思想社, 1973年
- Dobb, Maurice, Sweezy, Paul, Takahasi, Kohachiro, and et al. ; in, *The Transition from Feudalism to Capitalism*, NLB, London, 1976. 大阪経済法科大学経済研究所訳『封建制から資本主義への移行』, 柘植書房, 1982年
- Fisher, Frederick Jack, ; *The Sixteenth and Seventeenth Centuries : The Dark Ages in English Economic History?*, in, *Economica*, new series, No. 93, 1957. 浅田実訳『一六、七世紀の英国経済』, 未来社, 1971年
- Habakkuk, Hrothgar John ; *English Landownership 1680-1740*, in, *The Economic History Review*, vol. x, no. 1, 1940. 川北稔訳『十八世紀イギリスにおける農業問題』所収, 未来社, 1967年



- Hill, Christopher ; *The English Revolution 1640*, in, *The English Revolution 1640. Three Essays*, London, 1940. 田村秀夫訳『イギリス革命』, 創文社, 1956年
- McNally, David ; *Political Economy and the Rise of Capitalism—A Reinterpretation*, University of California Press, 1988
- Mathias, Peter ; *The First Industrial Nation: an Economic History of Britain, 1700-1914*, Methuen, London, 1969. 小松芳喬監訳『最初の工業国家』, 日本評論社, 1972年
- Marx, Karl ; *Das Kapital*, Bde. I & III, in *Marx=Engels Werke*, Bde 23, 25, Diez Verlag, Berlin, 1962. 邦訳『マルクス・エンゲルス全集』23, 25巻, 大月書店, 1966年
- Ormrod, David ; *English Grain Exports and the Structure of Agrarian Capitalism 1700-1760*, Hull University Press, 1985
- Tawney, Richard Henry ; *The Rise of the Gentry, 1558-1640*, in, *The Economic History Review*, vol. 11, no. 1, 1941. 浜林正夫訳『ジェントリの勃興』, 未来社, 1957年
- Wood, Ellen Meiksins ; *The Origin of Capitalism*, Monthly Review Press, N. Y., 1999. 平子友長・中村好孝訳『資本主義の起源』, こぶし書房, 2001年
- 岩井淳・指昭博編『イギリス史の新潮流』, 彩流社, 2000年
- 宇野弘蔵『経済政策論』, (『宇野弘蔵著作集』七, 岩波書店, 1974年)
- 宇野弘蔵『経済学方法論』, (『宇野弘蔵著作集』九, 岩波書店, 1974年)
- 宇野弘蔵「過渡期の取扱い方について」, (『宇野弘蔵著作集』九, 岩波書店, 1974年)
- 宇野弘蔵『資本論入門』, (『宇野弘蔵著作集』六, 岩波書店, 1974年)
- 大内力「帝国主義論前史」, (『大内力経済学大系』四, 東京大学出版会, 1985年)
- 越智武臣『近代英国の起源』, ミネルヴァ書房, 1966年
- 川北稔『工業化の歴史的的前提』, 岩波書店, 1983年
- 椎名重明『近代的土地所有』, 東京大学出版会, 1973年
- 常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会』, 岩波書店, 1990年
- 新田滋『段階論の研究』, 御茶の水書房, 1998年



## On Uno's Stage Theory of Mercantilism —A Critical Comment—

Tsuyoshi SAKURAI

### 《Abstract》

This paper argues Uno's Stage Theory of Mercantilism. The purpose is to present the concepts of his theory and then to assess its implications through a critical analysis of the works of various historians (including Marx) on the transition from feudalism to capitalism. Though Uno's approach represents a great advance in developing a scientific methodology of Marxian Economics, it leaves many problems unresolved. Most of the studies, especially those in the area of the Stage Theory of Mercantilism, concern the Merchant Capital form. According to Uno, it is essential to grasp that Merchant Capital was the dominant form of capital at that time. Further, Uno contends that in terms of merchant capital, the domestic woolen manufacturing industry in England was the most characteristic form of capitalistic production. Indeed, woolen products were the main exports of England by the 17th century. However, the share of woolen products to total exports had remarkably decreased by the mid-18th century. Therefore, clarification is necessary of the unclear meaning of the putting-out system of cottage manufacturers, who were engaged in woolen spinning and weaving in England as so-called Merchant Capital, and the role assigned to the Merchant Capital in its capitalist accumulation process during the 16th and 17th centuries. After critically observing these points, the author asserts that Uno's Theory is ambiguous in its explanation of the activity of Merchant Capital due to a lack of historical consideration of both English triangular trade and agrarian capitalism in those days. Consequently, Uno's Stage Theory of Mercantilism should be re-

examined from two perspectives, methodological and historical.